



いきものがかり ～ OECC による生物多様性への挑戦～

一般社団法人 海外環境協力センター 研究員 落澤 音々

OECCの活動領域3本柱の一つである「生物多様性」事業において主として活動を進めているのが、2020年に立ち上げられたチーム「いきものがかり」です。さまざまなメンバーが参加し、活動の輪を広げています。

Nbsへの取り組み：マングローブ植林調査事業

「自然を活用した解決策」(NbS)に関する取り組みとして、フィリピン共和国ビサヤ諸島におけるマングローブ植林調査を実施しています(詳細はOECC会報第99号を参照)。マングローブ林は、陸域生態系よりも多くの炭素を吸収・固定するほか、津波や高波から陸地を保護する防災機能、生息地としての機能等、さまざまな生態系サービスを保有しているため、生物多様性保全、そして気候変動の緩和策と適応策両方の観点からその保全と回復が重要視されています。本調査では、カネパッケージ株式会社が植林したマングローブ林におけるカーボン・クレジット創出に向けた検討を進めており、2023年9月と11月の現地出張では、専門家と共に植林地の炭素吸収量のモニタリング方法を検討したほか、フィリピン政府による国内の森林プロジェクトのCO₂吸収量を認証する制度等への申請について現地政府関係者と協議しました。



フィリピン環境天然資源省第7地域支部との協議



バナコン島での炭素吸収量のモニタリング方法調査の様子

生物多様性条約に関する国際交渉支援

2022年の生物多様性条約第15回締約国会議(CBD-COP15)において、遺伝資源のデジタル配列情報(DSI)の利用から得られる利益の公正かつ衡平な配分が決定して以来、DSIの利用に伴う利益配分の方法等についての議論が世界中で加速しています。DSIの定義については未だ議論が行なわれているところですが、塩基配列データ(遺伝子を構成するATGCの配列)等、遺伝資源から得られる情報のことを指します。

OECCは農林水産省事業の一環として遺伝資源利用やDSIに係る国際情勢の動向調査を実施し、2023年11月、スイス・ジュネーブにて開催された生物多様性条約DSIアドホック公開作業部会(CBD-WGDSI-01)と、イタリア・ローマにて開催された食料及び農業のための植物遺伝資源条約第10回理事会(ITPGR-GB10)に参加して、会議記録を作成しました。CBD-WGDSI-01では、CBD-COP15の決定に基づき確立されたDSIの利用に係る利益配分のための多数国間メカニズムの態様について議論されました。ITPGR-GB10でも、多岐に渡る議題の中で、植物遺伝資源から得られるDSIの扱いやCBDとの協力について交渉され、17の決定文書が採択されました。



CBD-WGDSI-01にて日本が発言中



ITPGR-GB10開催会場の国際連合食糧農業機関(FAO)本部